

交流協会設立 40 周年と私の「自分史」

公益財団法人交流協会専務理事 井上 孝

交流協会設立後の 40 年における私の自分史と台湾との接点から、台湾の歴史の一端を振り返ってみたいと思います。

交流協会が設立された 1972 年は、私にとって翌年からの通産省入省を控えた大学生最後の年でした。当時の社会的ムードは、佐藤栄作長期政権にたいする倦み、ニクソン・キッシンジャー訪中に置いてきぼりを喰わされた同政権に対する失望感、焦燥感、さらに閉そく感といったものが、立志伝中の人と喧伝される田中角栄通産大臣の予想外の内閣総理大臣就任と、続く電光石火の北京訪問、日中共同声明発表によって一挙に吹き払われ、日中国交回復歓迎ムード一色であったように記憶しています。この中では、突然に国際空間から放り出されることになる台湾民衆への想いなどの余地はなかった気がします。現在では当たり前となっている共産党独裁下の大陸 vs 自由台湾という体制比較についても、時の台湾は蒋介石・蔣経国と続く国民党独裁下であり、どちらもどっちで、台湾への共感の余地はありませんでした。

そのような私の台湾観を変え始めたのが、1983 年から 3 年間にわたるロスアンゼルス総領事館勤務でした。時の米国大統領はロスを政治的出身地とするレーガンであり、勤務面でも非常に刺激的な 3 年であったのですが、その時に台湾に関連した二つの経験をしました。

一つは、ロスオリンピック開催の興奮まだ冷めやらぬ 84 年 10 月に、蔣経国の伝記作家であった米国籍の江南がロス郊外の自宅で惨殺される「江南事件」が発生したことです。米当局の捜査により、台湾特務機関の指示で台湾の暴力団員により

実行されたことが判明するのは少し後ですが、発生当時から現地マスコミは蔣経国政権による暗殺であると報じていたように思います。私の率直な印象は、蔣経国政権の粗暴さへの驚きと同時に、レーガンの支えを頼りにしている独裁政権がレーガンのお膝元で暗殺事件を起こすとはなんたる失態か、何かおかしくないかというものでした。事実、日本に続き米国との外交関係も失い孤立感を深める蔣経国政権にあって、蔣経国の糖尿病が悪化するという混乱の中で発生した特務幹部の暴走であったようです。他方、このような混乱の中でこそ、李登輝をはじめとする本省人の中枢への登用、立法院定数増加、党禁解除方針など次の民主化につながる動きが出ていた訳です。

二つ目は、在日の本省人で、御主人は台湾におり、本人だけがロスに移住し日本総領事館で勤務しているという複雑な背景を持つ現地職員の存在です。台湾には蔣経国とは別にその下で必死に生きる努力をしている民衆がいるという当然の事実初めて思い至った時でした。

次が、96 年の台北事務所への赴任となります。大陸のミサイル発射という緊張の中で実施された最初の台湾総統民選において李登輝が大勝し新任期が開始された直後の赴任でした。その後三年余台湾民衆と直に接する経験を持てたことが私の現在の台湾観を決定しました。

ちっぽけな私の自分史ですが、私のそばにも確実に台湾の歴史はあったように思います。

なお、申しあげるまでもありませんが、以上はすべて筆者の私見です。